



安心のネットワーク

NOSAI

病害虫防除指導報

第373号

令和6年6月25日

発行

秋田県農業共済組合
北秋田山本支所

☎0185-54-5540

県農業振興普及課の生育調査（6月10日現在）では、草丈は平年より短く、茎数が少なく、葉数は平年並となっております。分げつ発生を促すため浅水管理を行い水温と地温を高めて日較差を大きくしてください。ただし、田面が露出しないよう水管理を行い、早期の茎数確保に努めてください。

目標茎数（70株植：20本程度、60株植：25本程度）を確保できたら中干しを開始（7～10日程度）して、根の活力を高めましょう。

葉いもち防除対策

余り苗や水田内で発病を確認した場合は、直ちに**予防剤**と**治療剤**の**混合剤**（ノンブラス剤又はブラシン剤）の茎葉散布を行います。これまでに**葉いもち**防除剤を使用している場合でも、速やかに茎葉散布を実施します。その後、必要に応じてビーム剤の追加散布を行います。なお、成分のトリシクラゾール（本田）及びフサライドの総使用回数はいずれも3回以内なので注意しましょう。

〈葉いもち防除剤〉

農薬名	薬剤の種類 (成分名)	粉剤 DL	ゾル	フロアブル
ノンブラス	トリシクラゾール フェリムゾン剤	○		○
ビーム	トリシクラゾール剤	○	○	
ブラシン	フェリムゾン フサライド剤	○		○
散布量（10a）又は 希釈倍数【散布液量】		3～4kg	1,000倍【100～150L】	

斑点米カメムシ対策

アカスジカスミカメはノビエやホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草の穂に産卵するため、これらの雑草が畦畔や水田内に繁茂するとアカスジカスミカメの増殖源となり斑点米の被害が大きくなります。5月28日発表の病害虫防除所による発生予報では、発生時期は**早く**、発生量は**多い**と予想されておりますので、雑草の生育状況を確認し処理が遅れない対応をしましょう。また、被害の未然防止のためにも畦畔や農道、休耕地、雑草地などの草刈りを出穂10～15日前まで数回実施してください。

紋枯病の防除対策

〈前年多発圃場は注意〉

紋枯病は、前年に発病した病斑上の菌核が水田内に落ちて越冬し、その菌核が7月下旬に稲株に付着して発芽します。また、出穂の早い年や出穂後高温多湿の気象条件では、上位の葉鞘まで病斑が進展しやすいため、前年の収穫期に発生が多かった圃場では特に注意しましょう（前年は出穂後の気温が高くなったため、進展している圃場が散見されました）。

〈防除の必要性の判断〉

紋枯病は、発病したら必ず減収するわけではありません。穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は減収のおそれがありますので、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤による防除を行いましょう（**発病株率が15%以下の場合、防除の必要はありません**）。

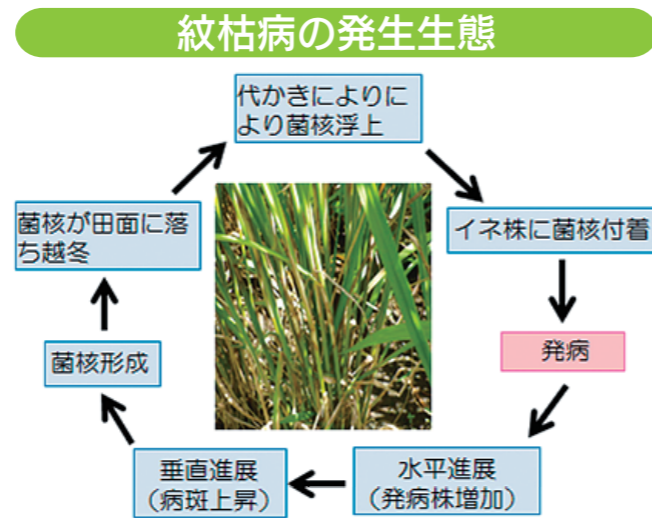
〈水面施用剤による防除〉

粒剤の散布時期は茎葉散布剤よりも早く、前年多発した圃場では、出穂15～5日前にリンバー粒剤、又は出穂20～10日前にモンガリット粒剤を散布します。また、本年多発した圃場では、翌年に有効な成分を含む育苗箱施用剤の施用も検討してください。

〈茎葉散布剤による防除〉

- 出穂直前の防除に重点をおく。
- 多発が予想される場合は出穂以降にも散布する。

農薬名	散布時期	散布量（10a）又は希釈倍数
バシタック バリダシン モンカット モンセレン	出穂直前～穂揃期	粉剤・DL 3～4kg 液剤 1,000倍 ゾル 800～1,000倍 水和剤 1,000倍 フロアブル 1,500倍



稲こうじ病の防除対策

稲こうじ病は、年次や作型にかかわらず同じ圃場に発生しやすい傾向があります。

稲こうじ病菌は、本病が発生した水田の地表で越冬し、移植後のイネの根に侵入し、生長点に進展します。その後、穂ばらみ期に降雨で葉鞘内が多湿状態になると、局在していた病原菌が幼穂に侵入して、出穂後に発病しますので対策をお願いします。



稲こうじ病

コバネイナゴの防除対策

〈7月上旬からの発生状況に注意〉

コバネイナゴ成虫の体長（頭部より尾端まで）は雄16～33mm、雌18～40mmとされ、体色は全体に黄緑色、背面は黄褐色、頭部複眼の後ろから前胸部にかけて黒褐色の縦条が走っています。体長や体色はかなりの個体変異がありますが、前翅端が腹端より短いものが多く、これがこの種の特徴とされています。幼虫は全身黄緑色で翅がなく、後胸部に翅芽があります。



コバネイナゴの成虫

コバネイナゴは年1回の発生で、幼虫のふ化は5月下旬頃から始まり、7月上中旬までの長期にわたります。ふ化した幼虫は畦畔や農道の雑草、畦畔沿いの稲を食害し、発育が進むにつれて水田内部に侵入し、老齢幼虫が多くなる7月下旬頃にはほぼ圃場全体に均一に分布するようになります。大部分の幼虫は5～6齢で老熟し、8～9月に成虫となります。

葉や穂を食害しますが、特に問題となるのは出穂後の加害で、登熟歩合、千粒重などを低下させ、収量、品質に影響しますので、必要な場合は7月上旬～下旬までに、茎葉散布剤を畦畔を含めて散布してください。

〈薬剤による防除〉

農薬名	散布量（10a）又は希釈倍数	散布液量（10a）	散布時期
トレボン粉剤DL	3～4kg	—	7月上旬～下旬
トレボン乳剤 トレボンEW	1,000～2,000倍 1,000倍	100～150L	

「あきたこまち」から『あきたこまちRへ』

〈あきたこまちRとは〉

「あきたこまち（母）」に、カドミウム低吸収品種「コシヒカリ環1号（父）」を交配した後、「あきたこまち」を7回戻し交配してできた品種（交配育種）です。放射線を照射して育成した米であると一部では間違った認識がありますが、実際は**交配育種**による米です。「コシヒカリ環1号」は、コシヒカリの種子に1度だけ放射線を照射して突然変異を誘発し、カドミウム低吸収性を持つ株を6世代以上栽培して、選抜を繰り返し育成された品種で、**放射線育種**は50年以上も前から多くの農作物の品種改良に用いられ、自然界でも起きる突然変異を利用した**一般的な育種法**です。現在、国内で生産される多くの水稲品種が、放射線育種由来となっています。さらに、大豆や野菜、果樹等でも様々な品種が育成され、一般的に流通し食べられています。もちろん、安全性に問題はなく、有機栽培としても認められています。収量、外観や品質、食味等の特性は「あきたこまち」と同等で、これに加え、重金属の**カドミウムをほとんど吸収しない**という特性を持っています。

〈栽培管理〉

これまでと栽培管理は同じです。ただし、生育に問題は無いものの、マンガンの吸収能力が低下していることから、一部の秋落ちしやすい圃場ではごま葉枯病の発生に注意が必要ですが、田植え時に使われるいもち病防除剤の種類を工夫すれば問題はありません。引き続き、稲づくりの基本である土づくりに努めることが重要です。

〈あきたこまちRに切替する理由〉

海外では、カドミウムの基準値は日本より厳しく、ヒ素の基準値も設定されています。海外の基準値に合わせて、国内基準値が厳しくなっても対応できるようにするためです。米産県として将来を見据え、国内外の消費者に安全な米を供給していくことが重要となります。

また、カドミウムとヒ素の両方を低減するためもあります。カドミウムとヒ素の水管理の対策は全く逆になります。カドミウム低吸収のあきたこまちRに切り替えると、湛水管理が不要となり、両方を低減することが可能となります。

〈日本と海外との比較〉

カドミウム	基準値
日本	0.4 ppm
香港・シンガポール	0.2 ppm
E U (欧州連合)	0.15 ppm

無機ヒ素	基準値
日本	未設定
香港・シンガポール	0.35 ppm

〈米袋の表示〉

「あきたこまちR」は、「あきたこまち」と形質や品質の評価に差がないので、品種群として1つの銘柄となり、米袋の銘柄は「あきたこまち」、品種名は「あきたこまちR」となります。